

音楽教育とハイテク

Music Education and High-technology

評価とハイテク(1)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

文化と文明

新年おめでとうございます。昔は正月に一斉に歳をとったものですが、最近は個人情報に保護されて人の歳は分からなくなりました。歳と言えば先日ちょっとショックな事がありました。カナダから里帰りした日系の老夫婦のお世話をして、デパートに行った時のことです。奥様だけの買い物に付き合っただけで支払いという時に、日本円とカナダドルの小銭が財布の中で混在していて中々取り出せないで困っておられたので、ちょっと横からお手伝いをさせていただきました。そうしたら店員の女の子が「ご主人様ですか？」と私に尋ねる。おっと、私よりも23歳も年上のご老人と私が夫婦に見えた？親子でもおかしくない歳の差なのに・・・店員曰く「ご高齢の方は皆様同じ位に見えますもので・・・」ダンディを自負する私がダブルパンチで傷ついたことは言うまでもありません。

人を評価するのに見かけだけでは難しいほんの一例ですが、音楽や音楽的才能を評価するのも同じように難しいのです。客観的な絶対評価が可能ならばとっくの昔に音楽は東大入試の必須科目になっていたでしょう。

評価の研究で有名な東洋(アス・マ・ヒロシ)先生の言葉に「評価とはその対象を理解することである」という言葉があります。ランク付けするのではなく順位で並べるのではなく、「○○は○○なんだと理解すること」が評価の根底の姿勢として必要であるということです。読者の皆様も雇用者であったりその逆だったりして人や能力を評価したり、されたりしなければならぬことが多いと思いますが、優劣だけで評価されることは決して無いと思います。右手が左手より勝るといふ評価の結果この世から左手が消えてしまったら右手だけでは何も出来ないことに気付くでしょう。左手は右手を助けるものだと思えば優劣では考えなくなるでしょう。細木数子の説教のようになりますが、区別と差別の混同が起こるのは理解の不足です。

今回のシリーズではこの「理解する」ということを基本にハイテクを音楽や個人評価のシステムに組み入れようとする提案をします。本論に入る前に、「新しい」ことがすべて善であるという概念や、古い物の良かったという概念を捨て、しきたりやブームに惑わされない新年の決意をして頂けると嬉しいです。

新しいことが善とする考え方は科学の世界つまり「文明」の考え方です。効率や合理性という考え方もそうですが、それ以上に「真理」を追求することが「善」であるという考え方が優先します。それに対して効率や合理性ではなく「美」や「道徳」というような価値観を共有することが「善」であるという考え方が「文化」です。論理に支えられて整合性を確立する文明(科学)は進化(統合・整理を含む)するのに対して、価値観に同調する人間に浸潤して広がってゆくの文化なのです。

文明は発達進化しますが、文化は進化せず「多様化」し発展することになります。また、多様化した文化が科学技術を細分化し、専門化した進化を促します。

ダーウインは進化論を唱え、発達の原理を確立しました。多くの科学技術もこの進化論と同じ系統樹に当てはめて考えることができます。そしてその中には絶滅した恐竜のようにもうこの世に存在しない多くの原種もあります。しかし、文明と異なり多くの文化的現象即ち価値観は適応による進化ではなく「言語」のように変化を求める劣化の結果多様化し、分化してゆきます。例えばキリスト教もイスラム教もユダヤ教から分化しました。そのキリスト教は宗教革命以後100近くの宗派に分化しました。仏教も日本では13宗に分化して広がりましたがそれはさらにオウムも含めて無数の「派」を誕生させました。これをダーウインの系統樹のように展開することは可能ですが、あらゆる宗教の分類は「唯神論」か「多神論」のくりに収まってしまい、時系列に伴う進化は見られません。寧ろ「習慣」や「興味」等に左右されて形を変えたり新しい物が生まれます。歴史的文化論では系統樹のような構造が説明に用いられますが、ダーウインは「個体発生は系統発生を繰り返す」とも述べ、例えば人間が最初単細胞の卵子から尻尾やエラや水かきを捨てて成長してゆく姿を生物全体の進化と重ねて説明している事に注目すれば、音楽や文化の時系列的な変化は無限に未来への延長線上を辿るのではなく時には数千年もバックしたり説明のつかない変化を遂げたりします。「文化」は「文明」と異なり進化ではなく多様化という変容を繰り返している事を前提に今年文明であるハイテクとの関係をテーマにしたいと思っています。